

徳川将軍家の刀剣

コレクション

久能山東照宮には、徳川将軍家から寄贈された刀剣を中心に、40 本以上の刀剣が所蔵されている。将軍は、就任時などの慶事の際に、刀を久能山東照宮に奉納する。将軍の使者が実際に刀を届けてくれることもしばしばあり、その供物だけでも、幕府の創始者である徳川家康公を弔うために神社に参拝することの適切な代替品と考えられていた。

神社に刀を奉納することは、徳川将軍家に限ったことではない。鎌倉時代（1185～1333）に武家政権が成立したときに始まったと考えられている。武士にとって、日本刀は単なる武器ではなく、神聖なものであり、宗教や儀式のために特別に鍛えられたものも多くあった。実際、刀は日本の皇室を構成する「三種の神器」の一つであり、他の二つは「鏡」と「玉」である。

日本刀について

日本刀は錆びやすく、劣化を防ぐために特別な手入れが必要である。江戸時代（1603-1867）、徳川幕府は刀の研ぎ師を雇っていた。また、保管している刀剣を保護するために、定期的に油を塗っていた。現在では、博物館のスタッフが江戸時代とほぼ同じ方法で手入れをしている。

久能山東照宮が所蔵する刀剣類の多くは、太刀と刀である。どちらも刃が長く曲がっているが、太刀の方が刀よりも長く、曲率も大きいのが一般的である。それぞれの刀剣の展示方法は、その刀剣の着用方法を反映している。太刀は研ぎ澄まされた刃先を下にして着用し、陳列棚に置くときは刃先を下にして置く。15 世紀に太刀に代わって登場した刀は、刃先を上にして着用されていたので、それを反映して展示されている。

この違いは、太刀が馬上で使用され、上方から斬りつけるものであったためと考えられている。一方、刀は武士が徒歩で使用したため、刃先を上に向けて鞘に納めれば、上から斬ることができた。

職人の技と金具

日本刀の鞘や綴じ具は、金工、漆工、木工、染織など、さまざまな職人が関わっている。久能山東照宮に献上された将軍家の刀は、当初は木の鞘に漆を塗り、絹の紐を複雑に結んでいた。各世代の刀の装飾はほぼ同じである。鞘は 1 本を除いて徳川家の家紋が入っていたり、紐はすべて同じ色で同じような結び方をしていたりする。